

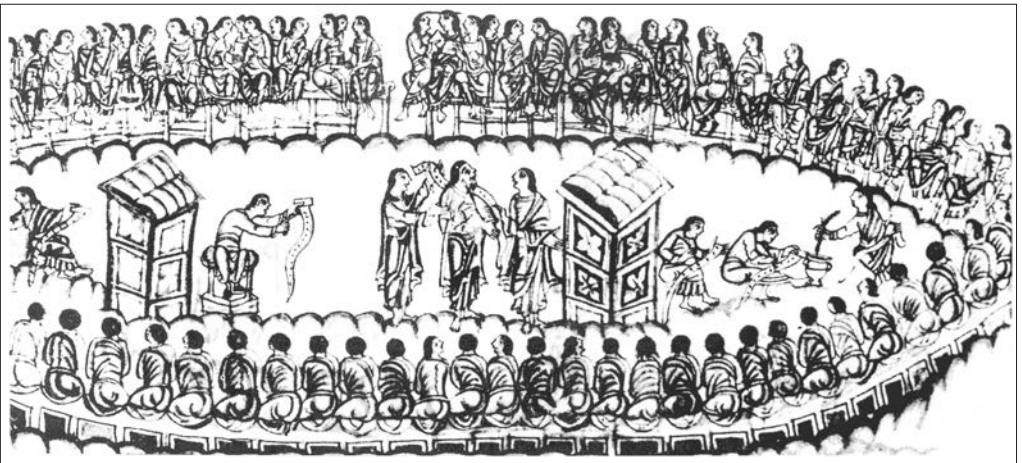
# 日本中世英語英文学会 第37回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2021年12月4日(土)～5日(日)

所：ウェブカンファレンス方式

The 37th Congress  
The Japan Society for Medieval English Studies  
4-5 December 2021  
Web Conference



日本中世英語英文学会

## 目 次

会長挨拶	3
プログラム	4
Programme in English	6
発表要旨            研究発表 1～8	8

会員の皆様におかれましては、別途お伝えする  
Zoom のパスコードや HP のパスワードを控えたうえで、  
大会サイトへアクセスして下さい。

- ◆ 発表者のハンドアウトは大会サイトに掲載されます。
- ◆ 万一接続不備があった場合、発表の順番が前後する可能性がございますのでご了承ください。
- ◆ 「当日会員」は無料です。事務局まで Eメールでご連絡くだされば、大会サイト入場、および Zoom ミーティング参加に必要な情報をお渡しします。

### 大会準備委員

鎌田幸雄（委員長）    伊藤 尽（副委員長）  
小笠原清香    岡田 晃    野地 薫    平山直樹    守屋靖代

### 事務局

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入  
同志社大学文学部 大沼由布研究室内  
TEL : 075-251-3770    E-mail: jsmes.2122@gmail.com

## 会長挨拶

会員の皆様

第37回全国大会によろこそ！本来であれば、早稲田大学で開催されるはずでしたが、コロナ禍のため、会員の皆様の安全を期して、昨年度に続き今回もオンライン開催となりました。困難な状況にもかかわらず、今年も非常に充実したプログラムになりました。8名の研究者の方々がそれぞれの分野における新たな知見を発表していただきます。そして、研究助成セミナーでは、研究助成委員会のご尽力により University of Oxford (St Cross College) の Francis Leneghan 先生をお迎えすることができました。諸事情によりセミナーは動画配信となりますが、特に若い研究者の方々の積極的なご参加をお待ちしています。

また、大会についてアンケートを行いますので、多くの会員の方々にご回答いただけますようお願い致します。皆さまからは開催形式などについてもご意見を頂戴できれば有難く存じます。対面による開催ができなかったこの二年間に私たちが学んだオンラインによる方法をポストコロナにもうまく活かすことが出来ればと思っております。

オンライン方式での発表をご快諾くださった発表者の皆さま、そして、今回のプログラムの作成と大会実施にご尽力くださった、大会準備委員会の皆さまと大沼事務局長、ご助言いただいた鈴木副会長、そして、技術面を力強くサポートしてくださった柳先生に心より御礼申し上げます。

それでは、いよいよ開幕です。第37回のプログラムをどうぞお楽しみください。

来年は3Dで皆さまにお会いしてお話出来ますことを祈りつつ。

2021年10月吉日

日本中世英語英文学会  
会長 和田 葉子

# 日本中世英語英文学会 第37回全国大会プログラム

2021年12月4日(土) 13:00～5日(日) 13:15 Zoom 開催  
資料掲示期間：2021年12月4日(土) 13:00～12日(日) 13:00

## 第1日 12月4日(土)

### 13:00～13:10 開会式

開会の言葉

会長 和田葉子 (関西大学)

総会 (資料掲示オンデマンド方式)

事務局報告

事務局長 大沼由布 (同志社大学)

### 13:10～14:10 会長講演

司会 不破有理 (慶應義塾大学)

Three Lands of Cokaygne: Middle English, French and Dutch

会長 和田葉子 (関西大学)

### 14:30～16:50 研究発表

文書掲示オンデマンド方式

1. 古英詩『ベーオウルフ』と『アンドレアス』における定動詞の韻律的配置  
李華雨 (慶應義塾大学大学院)

### 14:30～15:10 司会 和田 忍 (東京都市大学)

2. Emblematic Code-Switching and Language Use: A Multilingual Perspective on Archbishop Wulfstan's Baptismal Homilies  
Jacob W. Runner (金沢大学)

### 15:20～16:00 司会 保坂道雄 (日本大学)

3. 古英語における CP 構造の発達と『ヴェルチェリ説教集』  
小林茂之 (聖学院大学)

### 16:10～16:50 司会 鈴木敬了 (大東文化大学)

4. 出わたりの〈y, w〉の機能再考  
藤原保明 (筑波大学名誉教授, 聖徳大学名誉教授)

## 第2日 12月5日(日)

10:00~13:10 研究発表

10:00~10:40 司会 三浦あゆみ (大阪大学)

5. 『カンタベリー物語』における非人称構文

福元智子 (京都大学大学院)

10:50~11:30 司会 小塚良孝 (愛知教育大学)

6. 古英語 *hātan* と *lātan* の使役語法

海田皓介 (明治大学)

11:40~12:20 司会 菊池清明 (関西外国語大学)

7. 『貿易商人の話』と『トロイルスとクリセイデ』における視覚による誤認

東中巴奈 (慶應義塾大学大学院)

12:30~13:10 司会 工藤義信 (石川県立看護大学)

8. チョーサーの narrative tense を考える

— Fleischman (1990) の機能論から見直す —

中尾佳行 (広島大学名誉教授)

13:10~13:15 閉会の言葉

副会長 鈴木敬了 (大東文化大学)

# PROGRAMME

SATURDAY 4 DECEMBER

## 13:00~13:10 Plenary Session

Opening Address WADA, Yoko, President of JSMES, Kansai University  
General Meeting with Reports and Announcements from the JSMES Office  
(available on the JSMES website)  
ONUMA, Yu, General Secretary of JSMES, Doshisha University

## 13:10~14:10 Inaugural Lecture

Presider: FUWA, Yuri, Keio University

Three Lands of Cokayne: Middle English, French and Dutch  
WADA, Yoko, Kansai University

## 14:30~16:50 Paper Sessions

1. A Comparison of Metrical Arrangement of Finite Verbs in *Beowulf* and *Andreas*

LI, Huayu, Keio University

(This will be a written paper available on the JSMES website.)

14:30~15:10 Presider: WADA, Shinobu, Tokyo City University

2. Emblematic Code-Switching and Language Use: A Multilingual Perspective on Archbishop Wulfstan's Baptismal Homilies

RUNNER, Jacob W., Kanazawa University

15:20~16:00 Presider: HOSAKA, Michio, Nihon University

3. Development of CP Structure in Old English with Special Reference to the *Vercelli Homilies*

KOBAYASHI, Shigeyuki, Seigakuin University

16:10~16:50 Presider: SUZUKI, Hironori, Daito Bunka University

4. Reconsideration of the Function of the Off-Glides <y, w>

FUJIWARA, Yasuaki,  
Professor Emeritus, University of Tsukuba /  
Professor Emeritus, Seitoku University

## SUNDAY 5 DECEMBER

### 10:00~13:10 Paper Sessions

10:00~10:40 Presider: MIURA, Ayumi, Osaka University

5. Impersonal Constructions in *The Canterbury Tales*

FUKUMOTO, Tomoko, Kyoto University

10:50~11:30 Presider: KOZUKA, Yoshitaka, Aichi University of Education

6. Old English *hātan* and *lētan* in Their Causative Usages

KAITA, Kousuke, Meiji University

11:40~12:20 Presider: KIKUCHI, Kiyooki, Kansai Gaidai University

7. Perceptual Error in *The Merchant's Tale* and *Troilus and Criseyde*

HIGASHINAKA, Hana, Keio University

12:30~13:10 Presider: KUDO, Yoshinobu, Ishikawa Prefectural Nursing  
University

8. Chaucer's Narrative Tense Revisited: Through Fleischman (1990)'s  
Functional Model

NAKAO, Yoshiyuki, Professor Emeritus, Hiroshima University

### 13:10~13:15 Closing Address

SUZUKI, Hironori, Vice-President of JSMES, Daito Bunka University

## 発表要旨

第1日 12月4日(土)

14:30~16:50 研究発表

### 1. 古英詩『ベーオウルフ』と『アンドレアス』における定動詞の韻律的配置

李華雨 (慶應義塾大学大学院)

本発表は『ベーオウルフ』と『アンドレアス』における定動詞の韻律的配置を比較し、同じ Mercia 起源とされる両作品の類似性を韻律的要素から探ることを目的とする。Fulk (1992) による地域の推定では、音韻の特徴から両作品とも Mercia 起源であるとされる。本発表では、次のような韻律的要素から両作品の類似性を検証する。定動詞の配置に関わる以下の三つの要素から比較を行う。まず、一詩行の前半行で二回頭韻を踏む場合において、定動詞が韻律的強勢を伴わないが頭韻を踏む割合と、それ以外の位置に置かれる割合を両作品間で比較する。次に、助動詞として文法化している文法動詞とそれ以外の語彙動詞が一詩行内で置かれやすい位置には違いがあるが、前者は後者に比べて頭韻を踏む割合が低い、一つ一つの動詞ごとにも違いがあるため、両作品間で比較をする。最後に、韻文と散文の大きく異なる点として韻律的規則のために語順の倒置が行われていることがあるが、両作品の定動詞がゲルマン語派に見られる動詞第二位語順からどの程度移動させられているのかを比較する。頭韻やリズムは伝統的な技法以外に作者の文体が反映されていると考えられるため、それらの類似性によって『ベーオウルフ』と『アンドレアス』の作者が同一人物あるいは同じ詩作伝統を受け継ぐ者であることが示唆される。

### 2. Emblematic Code-Switching and Language Use: A Multilingual Perspective on Archbishop Wulfstan's Baptismal Homilies

Jacob W. Runner (金沢大学)

Prominent as both a religious and legal figure, the writings of Archbishop Wulfstan (d. 1023) can elude easy categorization. They are, moreover, indebted to both Latin rhetorical and Old English vernacular traditions.



Drawing together studies of Wulfstan's surrounding cultural atmosphere (Hadley and Richards 2000; Townend 2002) and critical evaluations of Wulfstan's personal style (Dance 2004; Lionarons 2010; Orchard 1992, 2007), this paper will first assess the complexity of Wulfstan's multilingual situation and present the case that his specific texts are best approached and understood in terms of reconciliation between his different influences.

Developing notions from previous research into medieval macaronic sermon writing more broadly (Schendl 2000, 2013; Wenzel 1994), this paper examines Wulfstan's series of homilies addressing the rite of baptism as a case study of individual multilingual writing practice. In addition to a consideration of source material and analogy with modern linguistic practices, the paper analyzes instances of cross-linguistic pragmatic awareness and emblematic language use (code-switching, transplantation). Ultimately, it offers a characterization of Wulfstan's engagement with multilingualism as part of his creative process and as a literary device, arguing that the overall pattern corresponds with other notable features of his writing style, such as prominent repetition and explanatory clarification.

### 3. 古英語における CP 構造の発達と『ヴェルチェリ説教集』

小林茂之 (聖学院大学)

古英語の特徴的語順である V2 語順には、ゲルマン諸語で一般的な V2 と同じく、動詞が CP に位置するタイプと、CP 以下の TP に位置するタイプとの 2 種類がある。これらの 2 種類の V2 の比率を初期古英語データとして『古英語版オロシウス』、後期古英語データとして『アルフリッチ諸聖人の生涯』について分析したところ、前者のタイプの V2 が増加していることが明らかになった。

さらに『ヴェルチェリ説教集』の V2 を分析し、先の結果と比較・検討すると、『ヴェルチェリ説教集』は両者のちょうど中間の数値を示すことから、古英語 V2 語順の変化の時系列における変化の中間段階を反映する資料であるとみられる。

『ヴェルチェリ説教集』では、特徴的語順として V1 語順が見られるが、話題転換のような談話的機能を持つことが指摘されている。これは CP が情報構造的な機能を持つことから説明できる。同様に、古英語の V2 における CP 構造の発達は第三要因とされる情報構造によって促進された変化であると論じる。

## 4. 出わたりの ⟨y, w⟩ の機能再考

藤原保明（筑波大学名誉教授，聖徳大学名誉教授）

yacht [jɔt] や wood [wud] の語頭の ⟨y, w⟩ は後続の母音と「入りわり」を形成する子音の [j, w] を表わす。一方, day [deɪ] や now [naʊ] の語末の ⟨y, w⟩ は入りわりと同じ字母であるのに, 先行の母音と「出わり」を形成する母音の [ɪ, ʊ] とみなされている。ただし, その根拠は十分に示されているとは言い難い。

そのために, たとえば, 語末の [ə] が15世紀までに消失した結果, 子音で終わる語は急増し, 母音連続は激減したが, その後, 1400年頃の長母音は大母音推移により出わたりの [ɪ, ʊ] で終わるようになり, 母音連続は語中と語間で遍在しているのに, 母音連続を避ける手段は「連結の r」と「侵入の r」以外は広く知られていない。

母音連続の回避からすると, 真逆の効果をもたらす大規模な通時的音変化が相前後して生じるというのは奇妙なので, 今回の発表では, 外来語の影響の少ない *Beowulf* や *Ormulum* などの出わたりの ⟨y, w⟩ の用法を精査し, これらが子音の機能を果たすことを示す十分な証拠を提示する。

## 第2日 12月5日(日)

10:00~13:10 研究発表

## 5. 『カンタベリー物語』における非人称構文

福元智子（京都大学大学院）

古英語期から中英語期において論理的主語を欠き, 動詞が3人称単数語尾をとる非人称構文が存在したが, 語尾屈折の消失と語順の固定化に伴い, 非人称構文は次第に衰退し, 人称構文へと推移した (van der Gaaf 1904)。非人称構文においては, 一般動詞だけではなく, *wel is me* のように be 動詞も人称代名詞の目的格と共起するため, 非人称動詞として用いられた。本発表では, Chaucer の *The Canterbury Tales* を調査対象とし, 中英語におけるこのような be 動詞を伴う非人称構文の頻度とその統語的特徴について述べる。また, be 動詞が主格の人称代名詞と共起する人称構文についても同様に調査を行う。このような非人称構文における人称化への発達に関して, 語順の観点から触れる。

## 6. 古英語 *hātan* と *lātan* の使役語法

海田皓介 (明治大学)

古英語では「(主語が) ある行為を他の者にさせる」という「使役」(causative)を表す語として、現代では廃用の *hātan* 'to command' と、*let* として残る *lātan* 'to let' が先行研究ではよく共に議論される。本発表は *The Dictionary of Old English Web Corpus* (Toronto, 2009) から用例を採取・分析し、「使役」語法にて *hātan* の衰退が *lātan* の拡大を促した可能性を示す。*hātan* には他に存在した 'to name' の意味が近代英語 *hight* として残る。また *hātan* の派生形 *behātan*, *gehātan* が主に賄う 'to promise' の意味が中英語で *hātan* (語形は *hōten*) に移る。こうして *hātan* は「使役」語法から外れるが、*lātan* は「使役」語法を保つ。本発表は先行研究が殆ど顧みていない、*hātan* の「使役」以外の語法も考えた複合的視点から語彙交代を議論する。

## 7. 『貿易商人の話』と『トロイルスとクリセイデ』における視覚による誤認

東中巴奈 (慶應義塾大学大学院)

中世における視覚論は、物体がどのように眼によって受け取られるか、という視覚のメカニズムについて論じた。その一方で、David Lindberg が指摘するように、視神経以降の物体の伝達についても対象とすることから、中世の視覚論は「準光学」と認識されてきた。14世紀後半を生きたイギリスの詩人、ジェフリー・チョーサーも、『貿易商人の話』(*The Merchant's Tale*)と『トロイルスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*)の中で、こうした中世の視覚論を描写していると考えられる。

本研究では、これら2作品における登場人物が空想する場面を対象とし、登場人物が直面する現実と、彼らの「空想」によって作り上げられる理想の間のずれ、つまり登場人物の錯覚の可能性を論じる。まず初めに、アラビア光学が西洋中世へともたらされた過程、そして光学が西洋中世に影響を与えたことを概観する。そして、アラビア光学に影響を受けた中世自然哲学者の一人、Roger Bacon が主張する誤認の条件に基づいて作品分析を行い、これら2作品に共通する描写に視覚論が影響を与えた可能性を指摘する。

## 8. チョーサーの narrative tense を考える — Fleischman (1990) の機能論から見直す —

中尾佳行 (広島大学名誉教授)

チョーサーの narrative tense は、時間を表すツールに留まらず narrative text の意味の層を表すツールでもある。時制は客観ではなく精神の問題である。従来の研究 (Mustanoja 1960, Benson 1961, Visser 1964, Kerkhof 1982) は、部分を切り取って、あるいは用法を個別的に取り上げて考察し、それぞれは重要だが、いずれも narrative tense の全体像の一部である。この点、Fleischman (1990) の機能論モデル (Referential, Textual, Expressive, Metalinguistic—中世フランス語に適用) が有効なツールと考えられる。Nakayasu (2013) は、KnT の Historical Present を aspect, syntax, discourse, pragmatics から考察、“synchronization” として結論付けるが、Fleischman の第4の層、Metalinguistic を考察外としているのは問題적이다。発表者は、これまでチョーサーの話法との関係で特に語り部の現在時制を調査し (中尾 2019, 中尾・池上 2020, Nakao 2021), “vividness” や “synchronization” では解けないもの、意味の層の問題があることに気づいてきた。本発表は、この点を Fleischman を援用、再調査し、結論的には、チョーサーの narrative tense は語り手や人物の心理・意識の動きと表裏をなして、意味が重層化していく傾向を捉えてみた。Tr は本追究の出発点である。

英米を中心に女性と戦争に関する文献約 350 点を全 7 巻に収録する画期的資料集

# 女性と戦争 —英語文献・資料集成—【復刻版】全 7 巻

## Women and War

General Editor: Donna Coates, University of Calgary

2020 年 6 月刊行 総約 3,140 頁 本体セット価：¥168,000 (+税) ISBN：978-4-86166-213-3

英語圏での「女性と戦争」に関する文献 350 点以上を復刻集成する画期的な資料集です。中世、ルネサンス期から第 2 次大戦までを対象にし、年代記、歴史書、日記、書簡集、文学作品、雑誌・新聞記事や史料集など、多様な資料から専門研究者が選書、抜粋した文献を、時代・地域別に 7 巻に編集、編者の解説が付されています。英米だけでなく南アフリカ・オーストラリア、カナダも含む英語圏を網羅し、特に関心の持たれている、クリミア戦争から第 1・2 次大戦期の看護と戦争に関する文献は独立した 1 巻に収録します。ジェンダーと戦争、女性と平和、女性参政権と戦争、女性兵士の問題など、国境を越えて議論が交わされ、共同研究も広がっている今日、女性史、ジェンダー史研究だけでなく、西洋史や国際政治史の研究、教育に役立てていただきたいコレクションです。

●各巻分野● Vol. I: 中世・ルネサンス期編 28 文献・約 450 頁 / Vol. II: 英国編第 1 期 (1660-1835) 46 文献・約 580 頁 / Vol. III: 英国編第 2 期 (1850-1950) 85 文献・約 430 頁 / Vol. IV: 米国編 33 文献 約 470 頁 / Vol. V: 英国編第 3 期 大英帝国と従軍看護 25 文献・約 370 頁 / Vol. VI: 南アフリカ・オーストラリア編 65 文献・約 410 頁 / Vol. VII: カナダ編 72 文献・約 430 頁

発行元：Edition Synapse (エディション・シナプス)

〒100-0014 東京都千代田区永田町 2-17-5-201 TEL: 03-6257-1030 E-mail: edsynapse@nifty.com

## 中世英文学の日々に

—池上忠弘先生追悼論文集—

チョーサー研究会／狩野晃一[編]

A5 判／256 頁／3080 円 (税込) 全 15 論文を収録

チョーサー研究会は、どのような人にも広く間口を開けて、チョーサーに限らず、古英語・中英語・近代英語・現代英語の言語と文学、歴史、美術に関する研究発表や講演を行ってきた。英語やその文学だけでなく、ヨーロッパ全体も見ておく必要があるし、歴史や文化も広く知らなければいけないという池上先生の言葉どおり、ここに集められた多様な視点を盛り込んだ数々の論考は、まさに池上先生の理想とされるチョーサー研究会のあるべき姿を表している。

英宝社 E@eihosha.co.jp 〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-7-7

<https://www.eihosha.co.jp/> TEL: 03-5833-5870 FAX: 03-5833-5872

